

作物名：水稲

病害虫名：イネドロオイムシ（イネクビホソハムシ）（学名：*Oulema oryzae*）



写真1 幼虫、蛹、食害痕



写真2 成虫



写真3 卵

1 被害の特徴と診断のポイント

（1）被害の特徴

- 白いかすり状の食害痕。成虫・幼虫ともに葉を食害するが、特に幼虫による加害が大きい。
- 加害程度がひどいと水田全体が白く見える。生育の遅れや茎数の減少、穂数の減少を招く。

（2）虫の特徴

- 成虫：体長約 4.5mm の青藍色の甲虫。頸は黄褐色。
- 幼虫：泥のかたまり状の排泄物を背負っている。

2 生態

- 年1回発生。成虫が草むらや山すその枯葉などで越冬する。
- 越冬後成虫の本田侵入は5月中旬以降の最高気温が 20℃を超える日に始まり、25℃を超えた日に大量侵入が起こる。
- 成虫は葉を食害しながら、約1か月にわたって葉面に産卵を繰り返す。
- 卵は1～2週間でふ化し、幼虫は約2週間で5mm となり、株元やイネの葉の上で白い繭を作り、蛹になる。
- 羽化した新成虫は稲の葉を食害した後、越冬地へ移動する。

3 発生しやすい条件

- 山間地：越冬に有利。
- 6月が低温で経過：成虫の産卵期間が長引き、幼虫の加害期間も長くなるため、食害が多くなる。
- 冬～春に平均気温が高い：越冬成虫の活動が早い。
- 早植え、多肥で生育旺盛：成虫が集まりやすい。

4 防除方法

（1）要防除水準

- 侵入盛期の成虫密度が 25 頭/100 株または、卵塊数が 80 個/100 株

（2）化学的防除

- 育苗箱施用剤、水面施用、茎葉散布剤を適期に使用する。

5 その他（県内における発生の推移）

- 育苗箱施用剤による防除が普及しており、近年発生は少ない傾向にある。
- 本県ではチアメトキサムに対する薬剤感受性低下が確認されている。

6 出典

(1) 参考文献

- 宮城の稲作指導指針（基本編）
- 日本農業害虫大辞典（全国農村教育協会）

(2) 写真

- 宮城県病虫害防除所撮影

（令和5年9月改訂）